

第5回日本語語学研修プログラム報告

塩 井 実 香

1. 第5回日本語語学研修プログラム実施までの大まかな経緯

一昨年の夏、韓国4大学からの学生計20名が四国の国立大学法人5大学で2週間の交流セミナーを行ったのを機に、本学では昨年度の夏、本センター初の試みである2週間の日本語語学研修プログラムを実施し、冬に2回目のプログラムを実施した。以後、毎年基本的に夏と冬の2回、定期的で開催しようということになり、昨夏の「夏季日本語語学研修プログラム」を「第1回日本語語学研修プログラム」、昨冬の「冬季日本語語学研修プログラム」を「第2回日本語語学研修プログラム」とし、今年度からは「第〇回」と冠して、回を重ねていくこととした。

今年度は、夏に第3回、第4回のプログラムを実施した。先にも報告したとおり、第3回が我々言うところの「定期便」であり、第4回は先方の要望により開催した、言わば「臨時便」である。そしてこのたび、冬季の定期便として、第5回日本語語学研修プログラムの実施に至った次第である。

本プログラムは、回を重ねるごとにさまざまな面で反省・改善を図ってきた。1コマあたりの授業時間数、授業内容、学外見学の回数や見学先、目的地までの距離・移動手段、研修生の宿泊先、ホームステイの期間、ホストファミリーをどなたにお願いするか、修了式の開催場所や形式、研修生の作文（研修レポート）を主にした冊子の作成、等々、研修生やホストファミリーへのアンケート調査などもふまえ、その都度より良いと思われる方法を教職員全員で話し合い、決めてきた。したがって、今回は、これまで4回の経験がかなり生かされた研修にはなったのではないかと思う。

2. 研修の概要

研修の目的・内容等は以下のとおりである。

2-1 本研修の実施目的

外国人学生に日本語教育を提供し、また、日本、特に香川県の歴史や文化を紹介するとともに、日本人および地域社会との交流を図ることを目的として研修を行う。

2-2 研修生

台湾の南台科技大学より19名。

内訳は、男性3名、女性16名。

専攻は、19名中、日本語専攻14名（学部2～4年生）、観光学専攻4名（学部4年生、大学院1年生3名）、工学専攻1名（学部4年生）。日本語専攻以外の5名は、日本語を第二外国語として学習中。

2-3 研修期間

2007年（平成19年）1月22日(月)から2月3日(土)までの2週間

2-4 研修会場

- (1) 授業：香川大学研究交流棟 生涯学習教育研究センター講義室
- (2) 学外実習：栗林公園、玉藻公園など

2-5 研修日程

- 1月22日(月) 開講式、ガイダンス、施設案内、本学日本人学生との昼食会、授業
23日(火) 授業、学外実習
24日(水) 授業
25日(木) 授業、学外実習
26日(金) 授業、ホストファミリーとの対面式
26日(金)～29日(月) ホームステイ
30日(火) 授業、学外実習
31日(水) 授業
2月1日(木) 授業、学外実習
2日(金) 授業
3日(土) 研修体験発表会、修了式、送別ランチパーティー

2-6 研修内容

火曜日・木曜日の午後は学外見学、1週目の週末は3泊4日のホームステイとし、それ以外の時間には1コマ50分の授業を午前・午後2コマずつ行った。

(1) 授業

「総合、読解、聴解、会話、作文、日本事情」の各授業を設定。「総合」では、自己紹介カードの作成や修了レポート(作文)集の製本などの作業を行った。「読解、聴解、会話、作文」では“読む、聞く、話す、書く”の4技能それぞれ焦点を当て、日本の新聞を読んだり、ドラマを視聴したり、日本人学生へのインタビューを行ったり、修了レポートである作文をまとめたりするなど、日本語を用いた実践的な活動に取り組んだ。「日本事情」の授業では、日本映画の鑑賞を通して、日本社会のあり方や人間関係について学んだ。

(2) 学外見学

公用車を利用し、香川県内にある文化施設等を見学した。

2-7 時間割

	1月22日(月)	1月23日(火)	1月24日(水)	1月25日(木)	1月26日(金)
10:00～10:50	開講式、ガイダンス、施設案内	日本事情(ロン)	読解(高水)	日本事情(ロン)	聴解(広嶋)
11:00～11:50		日本事情(ロン)	読解(高水)	日本事情(ロン)	聴解(広嶋)
13:00～13:50	総合(高水)	学外実習	会話(塩井)	学外実習(隆祥産業株式会社)	会話(塩井)
14:00～14:50	総合(高水)	(栗林公園)	会話(塩井)		会話(塩井)

	1月29日(月)	1月30日(火)	1月31日(水)	2月1日(木)	2月2日(金)
10:00~10:50	授業なし	日本事情(ロン)	読解(高水)	作文(塩井)	聴解(広嶋)
11:00~11:50		日本事情(ロン)	読解(高水)	作文(塩井)	聴解(広嶋)
13:00~13:50		学外実習(歴史博物館、 玉藻公園、サンポート)	作文(塩井)	学外実習 (四国新聞社)	総合(高水)
14:00~14:50			作文(塩井)		総合(高水)

3. 気づいた点など

3-1 研修生について

応募条件としては、これまで同様、「主として香川大学と学術交流協定を締結している海外の大学に在籍中の、日本語日本文化等主専攻または副専攻の学部学生で日本語レベルの中級程度以上の学生を対象」としていた。しかし、「副専攻」の解釈如何によるのだろうか、やはり、日本語を専門とせず、日本語能力がやや心もとない参加者が数名見られた。日本における日本語での研修であり、応募者全ての母語に通じたスタッフが揃うわけではないことなどから、研修の効率や研修生の安全確保等のためには、どうしても研修生には一定以上の日本語力が求められることになる。参加希望者には、応募時に応募動機等を含む自筆の書類を提出してもらっているが、これのみで中級レベルに達しているかどうか判断するのは、これまでの経験上なかなか難しい。応募書類の書式に、日本語能力試験の取得級といった何らかの客観的な情報を記入する欄を設けるなど、改善策が必要である。

募集要項で対象を「学部学生」としていたのに対し、今回の研修では初めて大学院生も3名受け入れた。これに関しては、筆者の私見ではあるが、学部学生の中にも年齢差がかなりあることを考えると（特に兵役で休学する学生の多い国では）、学生同士が異年齢に違和感を感じないのであれば、受け入れる側としては特に問題ないのではないかと思う。

主として本学学術交流協定校を対象、という件に関しては、今回参加の南台科技大はこれに当てはまらない。しかし、昨年度も同大学より10名の参加実績があったこと、同大・本学とも今後の本学とのさらなる協力体制構築を望んでいること、双方工学部で部局間交流協定締結を検討中であることなどを鑑みると、非協定校である南台科技大からの受け入れは意義のあることと思われる。

なお、今回参加者募集時には、韓国の2大学（うち一方は本学協定校）も多数の希望が寄せられた。残念ながら両校とも都合により参加はかなわなかったが、協定校のほうの希望者には、第3回時に参加してくれた、いわばリピーターの学生がいたこと、非協定校の窓口教員も、本プログラムおよび香川県に大きな関心をお持ちであったことなどから、今後の交流を広げていく意味でも、関心を示してくれる協定校・非協定校ともに情報を提供し、呼びかけを行っていくことが望ましいのではないだろうか。

3-2 研修期間・日程について

これまでの研修では、当初は国・地域を特に限定することなく本学の協定校に参加を呼びかけていたが、参加者は第4回（臨時便）を除き全て韓国と台湾からであった。日本の大学では1コマ90分だが、韓国・台湾ともに1コマ50分である。学生の集中力や要望等もふまえ、第2回以降は1コマ50分としており、これは適切な設定であると思われる。

研修期間は、これまで2週間としてきたが、今年度に入り、より長期間を臨む声も聞かれるようになってきたことから、次年度以降は、2週間のものに加え、4週間と6ヶ月間の受け入れ（ただ

し6ヶ月のほうはおそらく従来の語学研修とは別枠となろうが)も検討中である。

日程的には、夏季と冬季という年2回は基本路線として継続したい。今後、夏季には韓国、冬季には台湾からの参加が期待できそうである。本学在籍中の留学生は、約9割が中国からであり、韓国・台湾からの学生は非常に少数派である。今後、本学とのつながりを深めていくためにも、韓国・台湾をターゲットにこの研修を続けていきたい。韓国・台湾とも年度開始が日本より1ヶ月早く、また冬には旧正月を祝う。先方が参加しやすい時期で、かつ、本学学生も試験期間等でなく研修生と交流しやすい時期に開催するのが望ましい。(蛇足ながら、南国台湾からの学生は雪を見たことがなく、昨年第2回も今回第5回も、学生たちはちらつく雪を見て歓喜していた。休日にスキーを楽しんだ者もいたようだが、冬に台湾から受け入れるというのは、この点でも参加者にとって記憶に残る体験にはなるだろう。)

3-3 研修内容(授業、学外実習)について

授業においては、2週間という短期間に、日本で実際に日本語を使用するという体験を重視する意味で、通常行われる、教科書を用いたいわゆる“勉強”スタイルはとっていない。

今回は「総合、読解、聴解、会話、作文、日本事情」の各授業を設定し、学生が興味を持って日本語を使える、実践的な授業を行うことを心がけた。具体的には、「総合」は最初と最後の授業に設け、最初は自己紹介カードの作成、最後は修了レポート(作文)集の製本作業に充てられた。「読解、聴解、会話、作文」では新聞・ドラマ・音楽CD・観光情報紙などを教材に、「日本事情」では映画を教材に、授業が行われた。日本人へインタビューするプロジェクトワーク的な活動も少し盛り込んだが、これらの授業形態は学生たちの印象にも残ったようで、嬉しいことに修了レポートに授業が面白かったと書いてくれた学生も数名いた。このような工夫は、研修生のレベルや関心に応じて今後も続けていきたい。

学外実習では、栗林公園・歴史博物館・玉藻公園・サンポート・隆祥産業株式会社・四国新聞社へ見学に行った。特に玉藻公園は好評で、修了レポートにも「栗林公園へ行かないと香川に来た意味がない」「機会があったら、ぜひ家族を栗林公園へ連れて行く」などといった感想が記されていた。四国新聞社では、見学記念の集合写真を翌日の朝刊に掲載してもらえ、これも良い記念になったものと思う。残念なことは、(日本の)歴史に興味のある学生が少ないようで、見学先として毎回組み込んでいる歴史博物館が、学生たちにはやや人気がないことである。

過去4回のプログラム実施における反省点として、学外実習先を県内遠方に設定した際には、電車での移動に長時間を要し、研修生にとっては肉体的にも経済的にも負担になる、ということがあった。また、大学近隣の場所であっても、徒歩で移動した場合、やはり普段歩き慣れない海外の学生にとっては、かなりの負担になった、ということもあった。したがって今回は、距離的にも遠すぎない場所を選び、かつ、事務方の配慮により公用車を手配できたため、実習先はいずれも大学から車で数十分圏内という条件を設定することができた。

第2回プログラム以降、栗林公園・玉藻公園では、高松市のボランティアガイドの協力を得て、説明を受けながらの見学を行っている。これは、地元の日本人と交流しながら、ガイドブックやパンフレットのみからは得られない情報を得る好機となっており、今後も続けていきたい活動の一つである。

なお、今回の学外実習の大きな反省点として、初回見学先の栗林公園で、到着してみたら学生が

一人足りなかった、という点があった。その後無事合流でき、事なきを得たが、研修生にとっては不慣れな地での外出ということで、点呼等の確認作業は十分行わなければならないことを痛感した。

3-4 その他の学外活動について

夏季に実施のプログラムでは、本学の異文化交流会 ICES と留学生会 KUFSA による日帰り島旅行を、いわばオプションとして週末に組み込んできている。今回はそのようなオプションは特になかったが、ホストファミリーの方々が、食事・観光・旅行・スキー等へ連れて行ったり、本学在籍中の中国人留学生と共に餃子パーティーに招いたり、学外でのさまざまな経験の機会を設けてくださったのは、ありがたいことである。

3-5 ホームステイについて

3-8 でも触れるが、今回は、週末を含む金曜日～月曜日に全員が3泊4日のホームステイをし、宿泊施設の関係で、19名中4名は、研修中全日程ホームステイをした。毎回のことながら、ボランティアでお引き受けくださるホストファミリーの皆様にはお礼の言葉もないほどである。

修了レポートを書かせてみると、研修生にとっていかにホームステイが大きな意味を持つものであるかがよく分かる。数日間の交流であっても、本当の親子、家族のような絆が生まれる。日本の文化、一般家庭の生活に大きな関心を持っている学生たちにとって、日本の家庭を体験する数日間は貴重である。

今回は、従来から引き続いて引き受けくださったご家庭だけでなく、新規にご協力くださったご家庭もいくつかあった。また、本学の教員も2名、ホストファミリーとしてご協力いただいた。このような形で、少しずつ国際交流の輪が広がっていくのは嬉しい限りである。地域貢献とまでは言えるレベルではないかもしれないが、本センターが、香川での国際交流の中継地点となり得ているなら幸いである。

3-6 本学日本人学生との交流について

この研修では、毎回、異文化交流会 ICES の部員が積極的に関わってくれ、同年代同士の交流は、研修生にも大きな意味と思い出を残している。今回も、研修開始前日、一行の本学到着に合わせて部員たちが出迎えに来てくれ、早速食事等に誘ってくれた。研修期間中を通して多くの交流を持ち、最終日の修了式にも参加してくれ、翌日の帰国の折には、早朝にも関わらず見送りにかけつけてくれた。

過去の研修では、日本で出会った研修生と ICES 部員が、次は研修生の母国で再会し、その後も親交を深めているといった、良い前例もある。

南台科技大の引率の先生からは、ホームステイと日本人学生との交流とが、他大学の研修では得られない貴重な経験になるとの言葉を頂戴した。語学研修の売りとしては、あるいは授業や学外実習を第一に挙げるべきものなのかもしれないが、このホームステイと学生同士の交流が、本プログラムの大きな売りであることは確かである。今後もより良い形で続けていきたいものである。

3-7 修了式・研修体験発表、送別ランチパーティーについて

修了式・体験発表・送別ランチパーティーは、第3回の時と同じく、市内のイタリアンレストラ

ンを借り切って行った。以前は大学生協の食堂で行っていたが、環境が変わるのはまた新鮮なものである。

留学生センター長が都合によりご欠席という状況で、偶然にも公務の合間を縫って学長が出席してくださり、修了証書授与とご挨拶をお願いすることができた。研修生とホストファミリーにとっては予想外の嬉しい出来事だったようで、学長は、ご多忙の中、個別の記念撮影にも快く応じてくださった。

修了発表は、従来同様、作文の時間に作成した修了レポートをもとに、教員が研修生にインタビューしていく形で行った。出席予定者の集合状況により修了式は30分ほど遅れて始まり、この発表が終われば昼食、という状況も手伝って、個々の発表に十分時間を費やせなかった感があるのはやや残念ではあるが、それでも研修生全員、来日当初よりも数段流暢で自信を持ったスピーチができたように思う。

3-8 宿泊施設について

第1回時、試行的に全員全日程ホームステイ（ボランティアの一般家庭および本学学生宅）とし、その難しさを痛感したことから、第2回以降、基本的に本学非常勤講師用宿舎である「幸町会館」を利用することとしてきた。今回もその予定であったが、参加希望者の人数の関係で幸町会館には全員泊まれなくなったため、ボランティアの方々に依頼し、4名の研修生を2週間全日程ホームステイとし、残り15名のうち3名（男性）を近隣のビジネスホテル宿泊、12名（女性）を幸町会館宿泊とした。

全日程ホームステイの研修生4名は、もともとホームステイを希望していたこともあって満足していたようだが、やはりいくらご好意とはいえホストファミリーへの負担は大きい。また、ビジネスホテルを利用すると、毎日の通学や、来日時・帰国時の大荷物を持つての移動も負担となる。今後はやはり、当初の予定どおり、平日は全員幸町会館に泊まることとし、事前の申し込み段階で受け入れ人数を調整することが必要だと思われる。

なお、幸町会館には個室と大部屋があることから、今回は、研修前半と後半とで部屋の割り振りを変え、皆が個室と相部屋との両方を平等に経験するよう配慮した。

4. 研修生およびホストファミリーによるアンケート結果

研修終了時、研修生およびホストファミリーを対象に行ったアンケート結果を見ると、総じて満足度が高かったことが窺われ、とりあえず安心はした。が、当然いくつかの指摘や課題も見出される。

研修生のほうは、研修内容（授業内容、学外実習先）に興味を持てなかったという回答がわずかだがあった。当然毎回配慮をはしているのだが、検討・改善の余地はある。その他、「宿泊施設にある設備（シャンプー・タオル・ドライヤー等の有無）を事前に知らせてほしい」といった声にも耳を傾けたい。

ホストファミリーからは、研修生へのホームステイに関する事前オリエンテーションの必要性を指摘された。これは今後行うべき改善点の一つである。

5. 今回の成果と今後の検討課題

今回の成果として挙げられるのは、まず何より研修生が満足して帰国できたことであろう。その他、日本人学生・ボランティアとの交流の場が多く持てたこと、研修・ホームステイ等を通して日本の生活や文化をいろいろ体験してもらえたこと、先方と本学とがさらなる協力体制強化を目指して見解の一致を見たこと、本学と地域ボランティアとのつながりが広がったこと、などがあるかと思う。

今後の検討課題については、本プログラム終了後すぐに教職員で反省会を行い、意見を共有した。この反省会を振り返り、また、先に3および4で述べたことを踏まえてまとめると、以下のようなだろうかと思う。

- ・ 参加者は「日本語主専攻または副専攻」の者に限定し、日本語能力は「中級」を要求する。
- ・ そのためには、応募動機等の作文を含む自筆応募書類からは測ることの難しい応募者の日本語能力を知る手段として、「日本語学習歴」および「日本語能力試験の受験状況（受験経験、取得級）」といった客観的情報を提出してもらう。
- ・ 募集人数は「幸町会館」に泊まれる人数に制限し、ホームステイは週末のみとする。これは、研修生間の格差是正、ホストファミリーの負担軽減、教職員による管理徹底のためでもある。
- ・ 人数制限にあたっては、1大学から最大10名とし、複数大学から受け入れ可能な体制をとる。
- ・ 実施時期は、参加国・参加校の学年歴（長期休業の時期等）、旧正月、本学の学期末試験時期などを考え合わせ、最も参加が見込め、かつ、本学学生との交流も見込める時期を選ぶ。
- ・ 研修生の多くが関心を持つ日本文化、すなわち、着物の着付け、お茶会、うどん作りなどの体験の場を多く設ける。講師として、地元ボランティアへの協力要請を検討。
- ・ ホームステイの前に、心得や周知事項を徹底するための事前説明会を設ける。
- ・ ホストファミリーは一般家庭であることを考慮し、研修生との対面式は、開催時間により配慮する。

これら一つ一つを検討し、さらなる工夫を重ね、より充実したプログラムを目指していきたい。



第6回日本語語学研修プログラムの中止について

高水 徹

2007年6月27日から7月28日まで、第6回日本語語学研修プログラムを予定しており、実際に参加者の募集も行ったが、本学における百日咳の流行により、残念ながら中止することになった。

本学における授業の一時休止や、それより長い期間、授業以外の活動を全て禁止した措置に合わせたものである。仕方がないこととは言え、参加予定だった学生本人以外に、協定大学やホストファミリー等にもご迷惑をおかけした。この場をお借りして、改めてお詫び申し上げたい。

第7回日本語語学研修プログラム報告

高水 徹

別記のように第6回日本語語学研修プログラムが中止となったため、本センターにとって1年ぶりにこのプログラムを行うことになった。第6回(夏季)は4週間を予定していたが、この第7回(冬季)は従来通りの2週間のプログラムである。

1. 研修の目的

目的については従来通り、「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介すると共に、日本人及び地域社会との交流を図ることを目的」としている。

この他にも、以前からであるが、このプログラムが留学の呼び水となることや、本学学生の国際交流の促進も意図されている。

2. 研修生

真理大学(台湾)より5名、建国大学(韓国)から3名の学生が参加した。このうち、男性は真理大学からの1名のみである。

学生の専攻は応用日本語学科が3名(真理大学)、観光学科が1名(真理大学)、財経学部財政税務学科が1名(真理大学)、英語英文学科が1名(建国大学)、経営学科が1名(建国大学)、不動産学部が1名(建国大学)、となっている。

3. 研修期間

1月21日(月)から2月2日(土)の2週間で、従来通りである。

4. 研修日程と時間割

以下のような日程及び時間割で研修を行った。

	1月21日(月)	1月22日(火)	1月23日(水)	1月24日(木)	1月25日(金)
10:00~10:50	開講式、	総合(和田)	日本事情(ロン)	聴解(高水)	日本事情(ロン)
11:00~11:50	ガイダンス、施設案内	総合(和田)	日本事情(ロン)	聴解(高水)	日本事情(ロン)
13:00~13:50	学外実習 (玉藻公園、	体験学習	会話(塩井)	学外実習	会話(高水)
14:00~14:50	サンポート)	(華道)	会話(塩井)	(石丸製麺)	会話(高水)

	1月28日(月)	1月29日(火)	1月30日(水)	1月31日(木)	2月1日(金)
10:00~10:50	授業なし	会話(和田)	作文(塩井)	作文(高水)	読解(塩井)
11:00~11:50		会話(和田)	作文(塩井)	作文(高水)	読解(塩井)
13:00~13:50		学外実習	体験学習	学外実習	総合(高水)
14:00~14:50		(山西商店)	(茶道)	(栗林公園)	総合(高水)

5. 授業

授業は従来通り、「会話」、「読解」、「聴解」、「作文」、「総合」の各日本語授業と、「日本事情」によって構成されている。「総合」では自己紹介等のイントロの活動や、研修の最後におみやげとして持ち帰る冊子の作成を行う。この冊子に掲載し、最終発表で用いられる文章を作成するのが「作文」である。「日本事情」には、ホームステイの事前指導等、この研修に直接必要な事項が含まれている。

今回は1月29日の会話の授業において、本学の留学生や日本人学生の協力を得ることができ、有意義なビジターセッションになった。

6. 学外実習

今回も玉藻公園、栗林公園の見学を行ったが、気温が低い季節なので、寒くて不評なのではないかと心配していた。実際に学生たちは寒がっていたものの、予想以上に好評だった。偶然、栗林公園では和装での婚礼用写真の撮影が行われており、学生たちは新郎新婦に頼んで一緒に写真に収まったりしていた。

企業見学については、石丸製麺株式会社の見学が、非常にうまくいったと言えるだろう。今までの経験より、企業見学においては、わかりやすさと興味をもちやすい内容であるかどうかが重要だが、今回の見学はどちらの条件も満たしていたようだ。粉が生地になり、延ばされて、切られてうどんになっていく行程が、実際の生産ラインの中で視覚的に確認できることがわかりやすさにつながったようだ。うどん自体も彼らがよく口にし、日本に来る前から興味を持っている食品である。

もう1つの山西商店は、やはり非常に日本的なものである桐下駄が生産されている。町中で見かけることはまずないとは言え、学生は下駄そのものに興味をもっていた。全体でもあまり大きくはない作業場が、行程によってさらに分かれていたため、今回の人数ではやや見にくい部分もあったが、何よりも下駄というものの事態に興味があるという点で好評だったようだ。

下駄を履いて歩いてみる体験や、完成品を見る機会も大変好評で、実際に下駄を購入して帰った学生もいた。

7. 体験学習

今回初めて取り入れたのが、体験学習である。華道、茶道という内容は学生にとって大変興味深かったようで、全体として非常に好評だった。

華道では、実際に花を活ける作業を通して、予想以上に力やコツの必要な作業であることを実感していたようである。どのようにバランスを取るのか、などの点で次々に指導を受けていた。できあがった花を並べて、多くの写真を撮る一幕もあった。

茶道では、本学のサークルの協力により、お茶をいただく側、提供する側の両方を体験していた。参加者にとっては、正座をする段階で特殊な体験であり、懐紙の使い方や、「もう十分いただきました」という表現を学ぶことで、限られた時間ながら充実した体験学習となった。最初はやや受け身だったが、後半にはいろいろな質問も出るようになった。

8. 気づいた点など

① 研修生について

応募条件としては、「日本語能力試験3級以上」ということと、「日本語日本文化等を専攻または副専攻」ということである。対象は主として協定大学の学生だが、従来通り、強く限定はしていない。

実際には、3級以上という点に関して、該当しない学生が1名入っていた。これは、今までにも何度かあったことである。このような学生が参加した場合、以下の問題が考えられる。まず、受け

入れる側として、レベルの違う学生が混在することで、授業の行いにくさが発生する。伝達事項がうまく伝わらない可能性もある。この中には、安全に関する事なども当然含まれる。学生同士の間でも、誰かが当該の学生のサポート的な役割を果たすことになり、不満が生じる可能性がある。また、本研修では必ずホームステイを含めているが、その際のコミュニケーションにも問題が生じる。

当該学生は、性格的に積極的に明るく、他の学生との関係も良かったため、大きな問題に発展することはなかったが、やはりホームステイではコミュニケーションの点でうまくいかなかった。また、最終発表についても、事前に質問項目を教える等のいろいろな配慮を行ったが、他の学生との差は大きかった。

この語学力の点については、できるだけ協定大学の窓口をお願いしていきたい点である。今回は、協定大学に出張する機会に恵まれたため、この点を依頼し、了承していただいた。実際には、協定大学以外の学生や、窓口を通さず、個人で応募してくる場合などもあるため、これで完全にこの問題が防げるわけではない。他の手段も用いて、より問題の起きにくい体制を築いていく必要がある。

② 研修期間・日程について

今回の語学研修も、従来通り2週間という期間で行った。この期間について、今までよく出ている意見として、短すぎるといふものがある。実際、今回の学生もアンケート調査でそのように述べていたし、協定大学を訪問した際にも国際交流の担当者からそのような意見が学生の意見として伝えられた。

残念ながら、冬季に4週間の研修を行うことは、受け入れ側として今後も難しいだろう。要因としては、本学の試験期間、入試等の日程が挙げられる。これらにより、スタッフが不足したり、交流が不十分になってしまう恐れがある。先に述べたように、夏季には4週間の研修を計画したし、今後もそうする予定である。眺めの研修を望む学生には、こちらを勧めていくことで対応したい。

授業時間は、50分とした。やはり、語学研修としてはこの長さがいろいろな面でやりやすいようだ。

日程としては、今回、体験学習を追加し、その分授業時間が減ったことになる。語学研修の意義という点から考えると、通常のいわゆる授業にこだわる必要はないと考えられ、実際に今回の試みも好評だった。次回以降も継続していきたい。

③ ホームステイについて

まず、何よりもホストファミリーの皆様がこの場をお借りして感謝申し上げたい。毎回のことであるが、ホストファミリーと学生とのつながりは、日本人学生や、本センターのスタッフとのつながりとは別のものであり、まさに家族のようなものである。ホストファミリーの皆様のご協力がなければ、本プログラムの評価はだいぶ異なるものとなるだろう。

今回、残念なことに、参加予定だった1名の学生が当日現れない、という事態があり、当該学生のホストファミリーにもご迷惑をおかけしてしまった。加えて、上で述べたように語学力の面でコミュニケーションに問題のある学生が含まれていたため、ご苦勞をおかけしてしまった。この学生が英語を話せたため、英語を話す他の学生を引き合わせてくださる等の工夫をしていただいた。これらの点に関して、改めてお詫び申し上げたい。

④ 本学日本人学生との交流について

この交流についても、いつものようにICES（異文化交流サークル）の学生たちが様々な面で協力してくれた。改めてお礼申し上げたい。上で、ホストファミリーとの交流が家族的である旨を述べたが、日本人学生との交流は距離の近い友人同士の交流である。同時に、お互いにとって、友人で

あると同時に、国際交流の相手でもある。今後もこの機会を活かしていけるようにしたい。

さらに、今回は、体験学習の茶道においても、表千家サークルの学生たちの力を借りた。今まで授業において協力を受けたことはあったが、このような形での学生の協力は初めてであり、今後もお願いしていきたいと考えている。

⑤ 発表会及び修了式、ランチパーティーについて

語学力に問題のあった学生は、発表会において、教員とのやりとりに苦勞していた。他の学生は、緊張はあったものの、問いかけに対して答えたり、自分の気持ちを伝えたりできていたようだ。

この締めくくりとしての発表会、修了式、パーティーには、ホストファミリーや交流に関わった学生たちも出席し、交流を楽しんでいた。

今回は、8人という人数で、特に急ぐ必要もなく発表を進めることができたが、人数が多い場合にはどうしてもやや急ぎ足になってしまう。

⑥ 本学教員の協力

今回、本学と真理大学の協定の窓口となっている笹橋明郎教授、及び韓国語の授業を担当している宮島美花講師に様々な面でご協力いただいた。本センターの教員や事務職員のみでは、できることに自ずと限界がある。このように学内からの協力を得たことは、大変ありがたく思っている。この場を借りてお礼申し上げたい。

9. 総括

まずは、当日現れなかった南ソウル大学の学生の件が残念である。この学生は、自分は研修に参加不可能になったと思いこんでいたようである。実際には、本学から南ソウル大学の担当者には受け入れる連絡が届いていたが、そこから学生に連絡が届いていなかった、ということである。本学から再確認したり、担当者と同時に本人にも連絡を取るなどの方法で、次回以降気をつけるべき事項である。

今回導入した体験学習は、今後もできる限り継続したい。華道、茶道などの伝統的な文化は、興味はあっても体験する機会がない、または、敷居が高い、などの理由で、個人の旅行ではなかなか体験できないだろう。

学外実習の見学先は、好評だった今回の事例を参考に、今後も研修生にとってわかりやすく、興味もてるものを選ぶよう努めたい。しかしながら、なかなか全ての条件がそろそろ場所が見つけないのも事実である。

今回の研修生のうち、3人が属する建国大学は協定大学ではないが、今後もこのような形での学生交流が期待できそうである。協定大学である真理大学についても、この研修に学生を派遣してきたのは初めてである。こちらも、今後も継続的に行っていけそうである。本センターにとって、交流を継続できるこれらの大学は、重要な相手であり、今後とも順調な交流が定期的に続いていくことを願っている。



第 8 回日本語語学研修報告

塩 井 実 香

従来、夏季と冬季の年 2 回、本学交流協定大学を中心に海外から希望者を募り、日本語語学研修を実施してきた。個別依頼により別途開催した第 4 回（センター内では便宜的に「臨時便」と呼称）の 1 週間を除き、これら年 2 回のいわゆる「定期便」は、いずれも 2 週間であった。しかし、参加学生や派遣元の大学からの要望、我々センター教職員のかねてからの意向等もあり、この第 8 回では初めて、期間を倍の 4 週間に拡大して実施の運びとなった。

1. 研修の目的

目的は従来どおり、「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介すると共に、日本人及び地域社会との交流を図ること」である。加えて、本研修が研修生あるいは研修生徒同大学の学生たちにとって本学への正規留学の呼び水となること、本学学生の国際交流が推進されることも意図されている。

2. 研修生

8 名の参加があり、全員が南ソウル大学（韓国）の学生であった。南ソウル大学は、本学協定校ではないが、これまでもこの語学研修への参加実績がある。

8 名の内訳は、男女別で見ると男性 2 名、女性 6 名と従来どおり女性のほうが多く、学年別では 1 年生 5 名、3 年生 2 名、4 年生 1 名、専攻は、4 年生 1 名がホテル経営学科であるほかは全員日本語学科の学生であった。

3. 研修期間

2008年 6 月 23 日(月)から 7 月 18 日(金)までの 4 週間である。4 週間という長さ以外に従来と異なる点としては、従来土曜日に行っていた修了式およびさよならパーティーを、平日の金曜日（7 月 18 日）に行ったことである。7 月 19 日(土)は予備日として設定した。

4. 研修日程と時間割

授業時間は、従来どおり 1 時間 = 50 分と設定し、午前・午後各 2 時間の授業・見学・実習等を行った。授業では、本センター非常勤講師 2 名にもご協力願った。

時間割は以下のとおりである。

	6 月 23 日(月)	6 月 24 日(火)	6 月 25 日(水)	6 月 26 日(木)	6 月 27 日(金)
10:00~10:50	開講式、ガイダンス、施設案内	会話(和田)	聴解(大野呂)	日本事情(正楽)	会話(塩井)
11:00~11:50		会話(和田)	聴解(大野呂)	日本事情(正楽)	会話(塩井)
13:00~13:50	総合(ロン)	学外実習 (栗林公園)	体験学習 (華道)	日本事情(ロン)	読解(高水)
14:00~14:50	総合(ロン)			日本事情(ロン)	読解(高水)

	6 月 30 日(月)	7 月 1 日(火)	7 月 2 日(水)	7 月 3 日(木)	7 月 4 日(金)
10:00~10:50	週末より ホームステイ	会話(和田)	聴解(大野呂)	作文(塩井)	読解(塩井)
11:00~11:50		会話(和田)	聴解(大野呂)	作文(塩井)	読解(塩井)
13:00~13:50		学外実習 (石丸製麺)	体験学習 (茶道)	日本事情(正楽)	会話(高水)
14:00~14:50				日本事情(正楽)	会話(高水)

	7月7日(月)	7月8日(火)	7月9日(水)	7月10日(木)	7月11日(金)
10:00~10:50	日本事情(正楽)	会話(和田)	聴解(大野呂)	学外実習 (金比羅宮)	会話(高水)
11:00~11:50	日本事情(正楽)	会話(和田)	聴解(大野呂)		会話(高水)
13:00~13:50	学外実習 (四国村)	読解(塩井)	体験学習 (書道)		日本事情(ロン)
14:00~14:50		読解(塩井)			日本事情(ロン)

	7月14日(月)	7月15日(火)	7月16日(水)	7月17日(木)	7月18日(金)
10:00~10:50	学外実習(NHK 高松放送局)	会話(和田)	作文(高水)	作文(高水)	総合(塩井)
11:00~11:50		会話(和田)	作文(高水)	作文(高水)	総合(塩井)
13:00~13:50	読解(高水)	聴解(大野呂)	体験学習 (邦楽)	学外実習 (玉藻公園)	
14:00~14:50	読解(高水)	聴解(大野呂)			

5. 授業

従来どおり「読解」「聴解」「会話」「作文」「総合」「日本事情」により構成した。2週間の研修だと、どうしても単発、1回完結型の授業が主になってしまうが、4週間だと週をまたいで数時間かけての授業も可能となるため、質・量ともに充実が図れたと思う。グループごとに質問項目を考えて実際に本学日本人学生へアンケートを行い、結果をまとめて発表したり、日本文化紹介を兼ねたテレビドラマや、日本と韓国を扱った映画を視聴したり、落語を使って文法学習をしたりと、各教員が趣向を凝らした授業が展開された。

なお、2008年度は全般的にセンター教職員の出張が多かったのだが、この4週間の期間中も、専任教員4人それぞれに国内外出張が予定されていたため、出張および通常授業（正規学生の授業）との兼ね合いを考慮して研修時間割を組むのが非常に大変だったことを、記録として付け加えておきたい。

6. 学外実習

先に表で示したとおり、栗林公園、石丸製麺（うどん工場）、四国村（四国の歴史が再現されている）、金比羅宮、玉藻公園へ見学に行った。二つの公園は本学からも近く、毎回研修生には好評だが、今回は日程的にも余裕があるため、遠方の琴平へも1日かけて出かけることができた。石丸製麺は2度目の訪問だが、今回は社長直々にご説明くださった。うどんの製造工程や展示されているパネル等は、日本語力が十分ではない研修生たちにも見て分かりやすく、うどんの試食や購入もできることから、見学先として好評であった。

また、我々が研修として準備しているわけではないが、毎年本学留学生が瀬戸内の島へ出かける「日帰り旅行」も、ちょうどこの期間内にあったため、希望者は7月6日(日)に本学留学生・日本人学生・地域ボランティアの方々と一緒に男木島へ行く機会も得た。

7. 体験学習

研修期間を4週間にしたことで最も良かったことのひとつが、体験学習の充実ではなかったかと思う。華道・茶道はこれまでも取り入れていたが、今回初めて書道・邦楽も実施した。華道は地域ボランティアの講師に、茶道・書道・邦楽は、本学でサークル活動としてこれらに従事している学生の協力を得て行った。研修生たちは、慣れない体験に苦勞しながらも、同じ花材でも個性あふれる作品に仕上げたり、好きな芸能人の名前を筆で書いたり、楽しく体験しているようであった。特に本学学生が講師となってくれた体験では、日本文化体験に加え、同世代同士の国際交流も果たせて、非常に有意義だったと思う。

8. その他

期間を4週間に拡大するにあたり配慮したことは、先述の授業運営や体験学習を通じての交流等を含めていくつかあるが、週末に行うホームステイを、第1週目の週末に設定したこともその一つである。理由は、渡日後間もないうちにホームステイを経験させ、香川の家庭とつながりを築いておくことが、研修生の精神面やその後の交流にプラスになるだろうと判断したからである。果たしてこの予測は的中し、その後もホストファミリー宅を訪ねたり、他の研修生のホストファミリー宅へもお邪魔したりと、交流が広がったようである。毎回温かく研修生を受け入れてくださる地域の方々には本当に感謝している。

研修の締めくくりとなる発表会、修了式、およびホストファミリーを招いての謝恩を兼ねたさよならパーティーについては、従来は土曜日に行っていたが、我々教職員側の事情もあり、今回は金曜の夕方に設定した。パーティーも、従来のように近隣のレストランを借り切ってではなく、本学生協食堂で行うこととした。7月18日(金)16時30分より修了発表(インタビュー形式での発表)を開始し、修了証書の授与、パーティーと続いたが、やはり平日ということで、参加希望の日本人学生も授業のある者がいたり、ホストファミリーも学校や仕事の関係で開始に間に合わない方がいたり、やや寂しい感もあったが、それでも、パーティーが始まる頃には、当初予定していたより多くの日本人学生やボランティアの方々が来てくれ、大変ありがたかった。

日本人学生と言えば、本学の異文化交流サークルICESの学生たちには、毎回非常に力になってもらっており、今後ともこの協力関係を是非継続させていきたいと思っている。

9. 今後に向けて

以上、記録をもとに思い起こしてみると、全般的に良かったことばかりまずは浮かんでくるのだが、当然ながら反省点もある。

個別の事例になってしまうのだが、研修申し込み時に保険への加入を義務付けているはずが、きちんと加入していない者がいたことである。体調を崩しても、医療費がかかるからと病院へ行かなかった。このような学生が数名、キャンパス内の保健管理センターに駆け込んだようで、同センターの医師からも留学生センター教員へ保険加入確認の必要性を言われた。今後は、控えを提出させるなど、本学側が加入を確認できる制度を作りたい。

また、期間中の宿泊に関しても、所定の学内の施設を使用するか否かで調整に難航した学生がいた。我々の管理の問題としても、やはり全員所定の学内施設への宿泊を原則として徹底させたい。

今年度冬季の第9回研修は、双方の学年暦等との関係もあり、従来どおり2週間で行うであるが、次年度以降、夏季は引き続き4週間の研修を行う予定である。今回の経験をもとに、より充実した研修となるよう反省・改善を重ね、近隣のアジアの国や地域からより多くの留学生が本学へ来て学び、交流する環境を作り上げていきたい。



第9回日本語語学研修プログラム報告

正 楽 藍

1. 研修の目的

外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介すると共に、日本人及び地域社会との交流を図ることを目的にして研修を行いました。

2. 研修生

真理大学（台湾）5名、輔仁大学（台湾）3名、蔚山科学大学（韓国）5名、建国大学（韓国）3名の合計16名

3. 研修期間

2009年1月19日(月)から1月30日(金)

4. 研修会場

- (1) 講 義 香川大学研究交流棟
- (2) 学外実習 栗林公園、玉藻公園などの香川県の歴史・文化施設
- (3) 体験学習 茶道、華道

5. 研修内容

- (1) 日本語教育については、様々な内容の読解、聞き取り、ディスカッション、作文練習を行い、研修最終日に、自由なテーマで研修体験を発表しました。
- (2) 学外実習については、香川県内の文化施設などを見学しました。
- (3) 体験学習については、華道や茶道などの日本の文化を学習しました。



6. 研修日程

月 日	事 項	月 日	事 項
1月19日 (月)	午前：開講式及びガイダンス 午後：総合（塩井） 夕方：情報交換会	1月26日 (月)	ホームステイ
1月20日 (火)	午前：聴解（大野呂） 午後：学外実習『栗林公園』	1月27日 (火)	午前：聴解（大野呂） 午後：学外実習『石丸製麺』
1月21日 (水)	午前：日本事情（ロン） 午後：体験学習『茶道』（表千家）	1月28日 (水)	午前：日本事情（正楽） 午後：体験学習『華道』
1月22日 (木)	午前：会話（塩井） 午後：読解（高水）	1月29日 (木)	午前：作文（高水） 午後：学外実習『四国村』
1月23日 (金)	午前：日本事情（正楽） 午後：作文（塩井） 夕方：ホストファミリーとの対面式	1月30日 (金)	午前：会話（高水） 午後：総合（ロン） 夕方：研修体験レポート発表会、 修了式、意見交換・反省会
1月24日 (土)	ホームステイ		
1月25日 (日)	ホームステイ		

7. 研修を終えて

台湾と韓国の2カ国のみではあるが、計4大学から16名の研修生を受け入れることができました。この内、本学の学術交流協定校は真理大学（2007年6月協定締結）であり、第7回の本プログラム以来、2度目の受け入れとなりました。建国大学からも、第7回以来2度目の受け入れ、輔仁大学と蔚山科学大学からは初めての受け入れでした。研修生の専攻は日本語の他、観光やデジタルデザイン、経済・商科系など、多岐に渡りました。日本語専攻の研修生のみならず、他の研修生も母国で日本語を数年学んでいる者が多く、教室での講義や学外実習などでの日本語に関しては大きな問題は発生しませんでした。ただ、日本語を学び始めたばかりの研修生が若干名おり、本プログラム開始当初、彼らと他の研修生との日本語能力の開きが心配されました。しかし、日本語学習歴の長い研修生が学習歴の浅い研修生を平易な日本語でフォローしたり、同じ国からの研修生が通訳したり、同年代の若者同士、助け合いの雰囲気が徐々に形成されました。

ホームステイについて、毎回のことですが、研修生の一番の楽しみ、そして心配はホームステイのようです。観光や留学などでこれまで日本へ来たことのある研修生であっても、日本の家庭での3泊4日は初めての体験です。「日本の家庭料理を食べてみたい」「日本の人とこんなことをお話ししたい」といった期待に胸をふくらます一方、「日本の人とうまくコミュニケーションできるだろうか」「失礼なことを言ったり、したりしてしまわないだろうか」という不安も抱えながらのホームステイのスタートです。ホームステイ終了後、研修生に感想を聞くと、一様に笑顔を浮かべながら、ホストファミリーと訪ねた場所や食べた料理、そして、ホストファミリーとの会話を紹介してくれます。最後の作文でも、必ずと言っていいほど、ホームステイの思い出が綴られます。2週間のプログラムを終えて帰国する際、空港やバス停に研修生を見送りに来て下さるホストファミリーの皆様とのお別れの時間は、我々教員の出る幕がないほどです。

第9回の本プログラム終了後の2009年夏、筆者は日本留学フェア（台湾）の出張にあわせて、真理大学と輔仁大学を訪問しました。どちらの大学のご担当者様も温かく迎えて下さり、本プログラムへの期待や要望を直接伺うことができました。両大学から出された要望は受け入れ研修生の数の拡大です。これは、本学の人員や宿泊施設の制限のため、直ぐに対応できるものではありませんが、今後継続して検討しなければならない課題の1つです。また、輔仁大学では、第9回の研修生の1名が輔仁大学を卒業後、日本の大学院への進学を決めたことも伺いました。本学への留学でなく残念ではありましたが、約2週間の本プログラムで、日本や日本語への関心を高めた結果であると思うと大変嬉しいニュースでした。さらに、2010年、嬉しいことが追加されました。第9回へ参加していた真理大学からの研修生が本学へ留学してきたことです。上にも書きましたが、真理大学と本学は学術交流協定を締結しており、その研修生は本学経済学部への留学でした。2010年春、本学キャンパスでその研修生と再会したときは、大変驚くと共に、約1年前の2週間のことが懐かしく思い出されました。今後も、本プログラムをきっかけに、日本、そして本学へ戻ってきてくれる研修生が出ることを期待します。

第10回日本語語学研修プログラム報告

正 楽 藍

1. 研修の目的

外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介すると共に、日本人及び地域社会との交流を図ることを目的にして研修を行いました。

2. 研修生

北京工業大学（中国）1名、南ソウル大学（韓国）3名、建国大学（韓国）3名、輔仁大学（台湾）3名、真理大学（台湾）2名、大邱大学（韓国）2名の合計14名

3. 研修期間

2009年6月29日(月)から7月24日(金)

4. 研修会場

- (1) 講 義 香川大学研究交流棟
- (2) 学外実習 栗林公園、玉藻公園などの香川県の歴史・文化施設
- (3) 体験学習 茶道、書道、華道

5. 研修内容

- (1) 日本語教育については、様々な内容の読解、聞き取り、ディスカッション、作文練習を行い、研修最終日に、自由なテーマで研修体験を発表しました。
- (2) 学外実習については、香川県内の文化施設などを見学しました。
- (3) 体験学習については、華道や茶道などの日本の文化を学習しました。



6. 研修日程

月 日	事 項	月 日	事 項
6月29日 (月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：聴解（大野呂） 夕方：情報交換会	7月12日 (日)	自由行動
6月30日 (火)	午前：総合（高水） 午後：学外実習『栗林公園』	7月13日 (月)	午前：聴解（大野呂） 午後：企業見学『KSB 瀬戸内海放送局』
7月1日 (水)	午前：日本事情（ロン） 午後：学外実習『高松サンポート施設』	7月14日 (火)	午前：日本事情（ロン） 午後：日本事情（正楽）
7月2日 (木)	午前：読解（高水） 午後：会話（塩井）	7月15日 (水)	午前：会話（高水） 午後：体験学習『書道』
7月3日 (金)	午前：日本事情（正楽） 午後：聴解（塩井） 夕方：ホストファミリーとの対面式	7月16日 (木)	終日：学外実習『金毘羅』
7月4日 (土)	ホームステイ	7月17日 (金)	午前：読解（高水） 午後：会話（塩井）
7月5日 (日)	ホームステイ／直島日帰り旅行(自由参加)	7月18日 (土)	自由行動
7月6日 (月)	ホームステイ	7月19日 (日)	自由行動
7月7日 (火)	午前：会話（高水） 午後：企業見学『石丸製麺』	7月20日 (祝・月)	自由行動
7月8日 (水)	午前：日本事情（ロン） 午後：体験学習『茶道』（裏千家）	7月21日 (火)	午前：会話（高水） 午後：日本事情（ロン）
7月9日 (木)	午前：聴解（高水） 午後：作文（塩井）	7月22日 (水)	午前：作文（高水） 午後：体験学習『華道』
7月10日 (金)	午前：日本事情（正楽） 午後：会話（塩井）	7月23日 (木)	午前：作文（塩井） 午後：学外実習『玉藻公園』
7月11日 (土)	自由行動	7月24日 (金)	午前：総合（塩井） 午後：研修体験レポート発表会、 修了式 夕方：意見交換・反省会

7. 研修を終えて

記念すべき第10回である今回は、中国と韓国、台湾の3カ国から計14名の研修生を受け入れることができました。6大学の内、本学の学術交流協定校は大邱大学（2005年5月協定締結）と南ソウル大学（2006年3月協定締結）、真理大学（2007年6月協定締結）、北京工業大学（2008年12月）の4大学です。本プログラムでのこれまでの受け入れ実績を見ると、南ソウル大学からは第8回の本プログラム以来4度目、大邱大学からは第3回以来2度目、建国大学と真理大学からは第9回に続いて3度目、輔仁大学からは2度目の受け入れとなりました。そして、今回初めて研修生を受け入れた大学は北京工業大学です。第9回同様、研修生の専攻も多岐に渡り、日本語の他、環境科学や建築学、教育学などでした。14名の内、中国から1名の参加、しかも、日本語専攻ではないことから、当初、我々受け入れ側は多少の心配をしておりました。しかし、一旦プログラムが開始されると、中国からの研修生も他の研修生と直ぐに仲良くなり、我々の心配は取り越し苦労であったことが分かりました。日本語でコミュニケーションが難しい場面では、英語を交えたり、身振り手振りで補ったりして、14名揃って、無事、4週間の研修を終えることができました。冬季の研修と異なり、夏季の研修は4週間です。また、7月は通常の学期中で、我々教員も正課の講義やその他の業務で多忙を極めます。こうした状況下で、本プログラムへの対応が十分にできるかどうかの不安は大いにあります。教員のみならず、職員の協力もいつにもまして貴重です。

学外実習について、これまででもご協力いただいていた石丸製麺株式会社様に加えて、新たに、株式会社瀬戸内海放送局様にご協力いただくことができました。第8回の本プログラムではNHK高松放送局様、第5回では四国新聞社様を訪問していましたが、趣向を変えて、地元の民放を学外実習の場所としてみました。日本人でも普段、なかなか見ることのできない放送局の現場を見学することができ、研修生にとっては貴重な体験となりました。毎回のプログラムへ入れている香川の観光名所などの見学について、第10回は栗林公園と玉藻公園、金毘羅宮を見学しました。真夏の日中、野外での見学は体力を消耗したことと思います。しかし、どの研修生も観光ガイドの説明を熱心に聴いたり、写真を撮ったり、楽しい思い出をつくったようです。体験学習では、茶道と書道、華道を体験しました。茶道と書道は本学の茶道部と書道部の学生へご協力いただきましたが、華道は第7回でご協力くださった明石様をお願いすることができました。戸惑いながら慣れない手つきでお茶をたてたり、筆を使ったり、日本ならではの経験をすることができました。華道では、お花のみならず、浴衣を着る機会にも恵まれ、女性の研修生だけでなく、男性も、自分の浴衣姿に大変満足の様子でした。

研修終了後しばらくして、14名の研修生の中の1名が日本の大学院への進学を考えており、その準備を進めているとの連絡をいただきました。第9回の本プログラムの研修生同様、受け入れた側としては大変喜ばしいことです。

8. 今後に向けて

今回も、大きな問題もなく研修を終えることができました。しかし、新しい課題やいまだ解決されていない検討事項はいくつかあります。まず、研修生の日本語能力の差が挙げられます。複数の大学から、しかも、専攻を日本語に限定せず募集することから、多少の日本語能力の差はいたし方ありません。また、「日本語能力試験3級相当以上」を条件としているものの、数多くある同類の研修の中から、本学の研修を選んで応募してくる研修生を、事前に厳しく選考するつもりはありません。一方、4週間という短い研修期間で、いかに日本語能力の向上や日本（人）に対する理解を深めてもらうのかを考えた際、やはり、日本語能力の高い研修生とそうではない研修生のいずれかに、多少の物足りなさ、反対に、難し過ぎるという印象を与えてしまいます。日本語能力の差の広がりや緩和するため、書面による事前の自己申告だけでなく、応募者多数の場合には、何らかの方法の簡単なプレテストを課すなどの策も講じる必要があるかも知れません。

次に、今回に限らず、我々受け入れ側が、本研修を受講したことで、日本語や日本（人）、そして、香川の歴史や文化に対する研修生の理解がどのように変化したのかを知っておく必要があります。これは、本研修の目的が「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介すると共に、日本人及び地域社会との交流を図ることを目的」としている限り大変重要なことです。研修直後の簡単なアンケートは毎回実施していますし、日本留学フェアなどで海外を訪れた際、派遣元の大学のご担当者様と意見交換をするにはしています。しかし、研修直後の研修生は、研修を終えて帰国することの高揚感からか、概して肯定的な意見をもちますし、派遣元の大学のご担当者様との意見交換でも、研修内容そのものについて深く議論するまでにはいたりません。研修生に、研修終了後暫く後に研修を改めて振り返ってもらい、本研修が彼らの勉学的意欲を含めた期待に応えるものであったのか、日本語や日本（人）に対する理解は深まったのかを調べる必要性を感じています。本研修が今後も回を重ねていくことを考えると、一度立ち止まって、これまでの研修をじっくりと振り返ることが必要かも知れません。

最後に、ホームステイにまつわる課題を述べておきます。毎回、ホームステイは研修生の一二を争う楽しみです。第10回を迎え、ご協力くださったホストファミリーも総計99家庭となりました。貴重な週末を研修生と共に過ごしてくださるホストファミリーには感謝の気持ちでいっぱいです。同時に、「ホームステイは本研修にどのような効果をもたらしているのか」を知る必要性も感じています。ホームステイ終了後の研修生は週末の楽しかった思い出を語ります。また、ホームステイ前と後とでは、授業などでの発言や態度にも変化が見られます。ホームステイが概して良い効果をもたらしていることは確かです。しかし、それがどのような効果なのかを具体的に知ることで、より良い研修、そして、ご協力くださるホストファミリーとのつながりをさらに深めていけるのではないかと考えます。